

妻として 母として

教師として

蒲原町 武田 範子 さん



「こんにちは」
はるかちゃんと祐輔君の元気な声が、私たちを迎えてくれました。玄関には花が生けられ、優しい心遣いが伝わってきます。

蒲原町に住む武田さん御夫婦は結婚して五年、四歳と二歳のお子さんがいます。夫の充弘さんは富士市の民間会社、妻の範子さんは蒲原町の小学校に勤める共稼ぎの御夫婦です。

範子さんの一日は、慌ただしく始まります。夫を送り出し、午前七時半に二人の子供を車に乗せ、七時四十五分、保育園に。そこから目と鼻の先の小学校へ。元気いっぱいの子供たちが範子先生を待っています。

仕事が定時には終わらず、保育園は午後五時までしか預かってくれないため、知り合いの小笠原さんに迎えを頼み、お宅に預かってもらっています。

「いい人に巡り会いました。御自分の中二と小五のお子さんと同じようにかわいがってくださいます。」小笠原さんのお宅へ迎えに行くのが、学期末や行事があるときは午後八時を回ることもあります。

一方、充弘さんは、帰宅が毎日午後九時半過ぎ。ただ完全週休二日制なので、「土、日は努めて子供と一緒に過ごすようにしています。」とのこと。

範子さんも夫を気遣い、「仕事が大変そうなので無理は言えませんが」と平日の家事、育児の一切を切り盛りしています。「家電製品に助けられて家事は手抜きなんですよ。どうしましょう。」と範子さん。実におおらかです。それでも「他の先生と同じように教え子を見てあげたい。」と朝四時から仕事をすることもあります。

そうした無理が重なったせいでしうか、去年の春にひと月ほど体調を崩し入院。このときばかりは、充弘さんもフレックス制を使い、子供の送り迎えをしました。

範子さんは、今までに一度だけ

仕事を続けるべきか悩みました。それははるかちゃんの育児休業明けのときです。ところが、いざ仕事を始めてみると、「とにかく子供たちがかわいくて……」範子さんにとって、教師は天職なのでしょう。充弘さんも「大変だが、学校へ行くことが「励み」になっている。」と温かく見守っています。



教師として・教え子と……

「小さい頃、母が勤めていたので、私は結婚したら、子供とずっと一緒にいると決めていました。でも仕事の魅力を知ると、できる範囲で家事をやり、そして仕事をずっと続けていきたいと思うようになりました。」

育児の面でバックアップしてくれている小笠原さん。精神的な支えとなってくれる充弘さん。迎えに行ったとき、「お母さん」と一番いい笑顔を見せてくれるはるかちゃんと祐輔君。皆に支えられながら、範子さんの奮戦は続きます。



母に励まされ

共に歩く

磐田市 鈴木照美さん

それまで元気だった照美さんのお母さんが突然倒れたのは、二年前の十二月のことでした。お母さんと同居している妹さんの電話に、車で五、六分の所に住む照美さんが駆けつけ、救急車を呼びました。脳梗塞による左半身マヒで延べ九か月の入院、その間、仕事をしつつ妹さんに代わって、少し前に仕事を辞めて家に入っていた照美さんが、看病を受け持ちました。全く寝たきりの状態から、リハビリと本人の努力で、今では杖を使いながら歩いたり、簡単な身の回りのことが自分でできるようになりました。照美さんも毎日付き添う必要がなくなり、週に四日、お母さんを風呂に入れたり、買い物な

どの家事を手伝い、残りの三日間は、妹さん家族の誰かがお母さんを見るという分担になりました。お母さんは夫が戦死した後、郵便局に勤めながら一人で照美さんと妹さんの二人を育て上げ、大学まで出しました。その苦勞を小さい頃から見て育った照美さんは、長男のところへ嫁いだこともあり、感謝の気持ちとともに負い目も感じていたと言います。今、「結婚以来の親孝行ができていると思っています。」

しかし、お母さんの病氣は完治するものではなく、これからもずっと照美さんたちの助けを必要とするでしょう。「毎日のことですから、無理をして自分がつぶれたら何もしない。息長く同じことを母にしてやれるようにしたい。」と、照美さんは気分転換も兼ねて退職後に始めた日本画と、盲人に声のテープを送ったり、外国人のために磐田市の地図を作るボランティア活動を続けています。



お母さんと

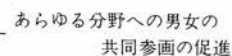
妹さんも「自分自身の休息を少しでも取るようにしています。家事などをやれないときは無理をしないで省くようにしています。」と介護する側の苦勞と工夫が伝わってきます。

照美さんは、昨年意を決して日本画を勉強している仲間とハワイへ旅行をしました。「六日間の日程でしたが、家に残る夫や舅の食事のこと、母のことなど、出発前には手配や準備に忙しく、何度もやめようかと迷いました。でも思い切って行ってみると、楽しくて本当に良かった。なんとかすれば旅行にも行けるんだということが分かって、少し気が楽になりましたね。」という照美さんにとって、何も言わずに自由に実家へ行かせてくれる御主人が、心の支えになっているようです。

「家族の介護とはいえ、親身になってできるかどうかは、それまでの心のつながりがどれほど強いかということであり、親子だから当然とはいかないでしょう。」という照美さんのお話からも、人とのつながりが希薄になりつつある今、身近な人間関係について、改めて考える必要があるようです。

おんなとおとこで共に築く

—静岡大学 うまい まさゆき 馬居政幸先生に聞く—



「婦人のための静岡県計画」を策定した昭和六十一年当時
に比べ、現在の女性を取り巻く
社会環境や男女の意識はど
のように変化しているとお考
えですか？



熱心に話される馬居先生

に子供は親だけで育てることは不可能です。そのためには、家庭と地域などのネットワーク、情報提供などが大切です。

また、高齢化対策も女性の負担を増やす方向ではなく、地域のケアなど、これからは今まで以上に考えていかなくはなりません。

修正計画の特徴である「参加」という言葉ですが、従来の「参加」とはどのように意味が違うのですか？

「参加」は、男の世界へ女が、女の世界へ男が相互乗り入れしていくことです。

さらに、これからは、共に働き共に子供を育ててはなりません。男性と女性が一緒になって新しい社会を作るのです。男性の職場に女性が入ってきたために起こる問題を考えるだけではなく、あらゆる場で、男性と女性が共に生きるために、新たに生じる様々な問題を解決するために、マイナス面や困難なことも含めて、責任を共有するということです。全く新しい男性と女性の付き合い方を考えなくてはなりません。

「参画」とは、男性と女性が共同責任で新しいシステムを作るこ

また、高齢化社会を考えると、地域のケアやボランティアが大切なものとなりますが、家族と家族のつながりも重要だと思います。

■ 家庭生活の安定及び福祉を向上させるために、県計画ではどのような施策を今後推進していくのですか？

家庭基盤の充実を図るために、両親教育の推進や地域活動の強化などに力を入れます。

そして、その親たちの様々な悩み、相談に効果的に対応するために、相談機能などの充実とネットワーク化を図ります。

また、家庭機能の充実・強化や高齡化社会についての広報・啓発、情報提供の推進などを積極的に図っていくためにはなりません。

取材を終えて

「年を取ってから腕を組んで歩ける夫婦になりたいですね。」と馬居先生。

御自分の四人のお子さんの子育ても例にあけながら、にこやかに話をしてくださいました。

これからは、御自身も含めて男性と女性が、共に新しい社会を築いていかなくてはという気持ちで、自然と伝わってきました。

ピカピカの一年生

こんど一年生になるので、おじいちゃんやランドセルを買ってくれました。早くこのランドセルを背負って学校へ行きたいなあ。とっってもうれしかったです。

(6歳 男子)

ヨーイドン!

スポーツテストの50m走を、お父さんに教わったとおり、腕をまっすぐ振ったら、前より早く走れてうれしかったです。

(小2 女子)

お母さんをおんぶ

この間、アキレス腱を切ってしまい、退院してからでもギブスをはめての生活でした。子供の幼稚園の運動会が近づき、こんな姿を人目にさらすのもと思い、おばあちゃんたちに応援を頼むことにしました。ところが当日になって、「僕が、幼稚園までお母さんをおぶってあげるから。」と子供が言い張るので。

到底できないことだとわかっていても、子供の気持ちに胸が一杯になりました。

(30代 主婦)

歩け 歩け

遠足で、往復20kmも歩いて日本平へ登ったの。そんなに歩いたの生まれて初めてだから、とっても疲れちゃった。でもね、海はきらきらして、富士山はとっても大きかったよ。車で行ったときと、景色がちがって見えたよ。

(小3 女子)

小さな生命

まだたった六週間という生命が、お腹に宿っています。実感はないのに……。不思議な気持ちです。

(20代 女性)

初めてのデモ

初めて住民運動で、デモに参加しました。初めてだから、最初とはかく恥ずかしくてたまらなかったのに、終わりのころになったら、気分爽快。大きな声だつてへっちゃら。自分たちの環境を守るために、こんなに大勢の人々が、がんばっていると思ったら、勇気百倍でした。

(30代 主婦)

バラの花束

先日、結婚十周年を迎えました。結婚記念日の朝、バラの花束が我が家に届いたのです。送り主を見ると、妹夫婦からでした。胸が熱くなりました。

(30代 主婦)

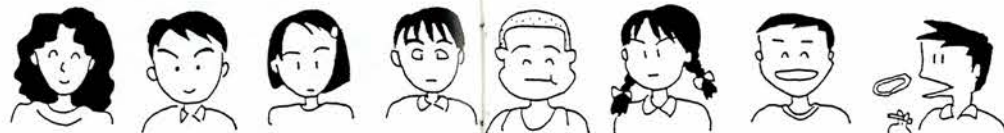
カーテンコール

ブラームスとレスピーギの作品を演奏した千葉のオーケストラはアマチュアとは思えないほどすばらしかった。割れんばかりの拍手が鳴りやまず、アンコールで演奏したサンサーンスの交響曲第三番も、熱が入って迫力があつた。

(20代 男性 研究者)

カーマンスクランブル

…ちょっとお耳を拝借いたします…



最近、感動したことありますか？

最近、感動しなくなった——という声をよく耳にします。いわゆる「豊かな社会」だからでしょうか。効率を求めるあまりの「あわただしい毎日」だからでしょうか。そんな中で量から質へ時代は移行しているともいわれています。より人間的な温かみを私たちは求めはじめています。ちょっと足を止めてみてください……。皆さんが最近感動したことをひろい集めてみました。

ナイスショット

道端の小さな花に感動した——なんて言っても信じてくれないだろうし、うーん困ったなあ。そういえば、この間のゴルフで20mのパットを沈めたよ。ちょっと違うかなあ。この年になると感動することもない……。 (40代 男性 会社員)

映画かなあ……

感動したこと？ ない。あえていえば学校で見た映画。身体障害者の映画だった。手足が不自由なので口を使っているいろいろな。その人ともう一人が主人公の映画だった。友達、福祉関係の仕事に就きたいって言っていた。私は、まだ決まらないのか。どうしよう……。何をしたいのか——自分でもよくわからないの。 (10代 女子 短大生)

すてきなおみやげ

先日、園児を送っての帰り道、「先生、おみやげ。今日、県立美術館へ行ってきたの。」と遠足帰りの昨年まで教え子だった小学一年生が小さな両手を差し出し、私の手の平に二つのお茶の実を入れてくれました。明るくあいさつして帰る後ろ姿を見送りながら、その子供たちの温かな心と成長のすばらしさを、しみじみ感じました。 (50代 女性 幼稚園教諭)

百点満点

先日の講演会で、「あなたは自身に点数をつけるとしたら何点ですか。」という質問になり、0点から順番に手を挙げていくことになりました。百点の人は、誰もいません。「なぜ皆さんは百点満点を、自分につけないのですか。たとえ料理がへたでも、自分は百点満点だと思えばいいのです。」と言われ、目の前がぱあっと明るくなりました。 (30代 主婦)

バスの中の出来事

バスの運転手が、市立病院行きが発車時刻を、おじいさんに丁寧に教えています。これは運転手用のだけど、どうぞ。」とコピーした時刻表を渡しました。バスの中に忘れものをして取りに来た女性に、「気がついたときに取っておいだから、中をよく確かめてください。」と笑顔でバックを渡しました。

自然で、ソフトで好感の持てる運転手の人柄に、車内は明るい雰囲気になりました。 (50代 女性 塾講師)



堂ヶ島の夕日

伊豆の堂ヶ島で、思いがけず見た夕日。それはそれは見事でした。目の前に広がっていく光景に思わず息をのみ、ただただ見とれていました。自然に勝るものはないなあ……という思いです。 (30代 主婦)

